

荒神谷青銅器発見40周年 里帰り! 青銅器 —埋納の地へ—

Homecoming! National Treasures Bronze Artifacts Exhibition - Back to Their Resting Place

国宝展ニュース NO.2

{全体会期: 2025.4.9(水)~2026.1.12(月・祝)}

発行年月日 : 2025年6月4日(水)

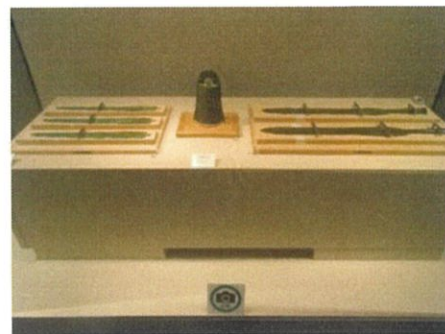
発行 : 荒神谷博物館

荒神谷から青銅器が大量に発見された。このニュースは、当時、大変な衝撃をもって迎えられました。それは、弥生時代の青銅器が数多く発見されたという事実のみならず、出雲において、強大な勢力がかつて存在したと想像し得るほどの証拠の一端を示したことにあります。

「出雲の地は、考古学的遺物に乏しい。記紀神話に書かれたような古代出雲の繁栄は無かったのではないかな…」

青銅器発見までは、このような主張が優勢でした。

かくして、荒神谷の青銅器は、一夜にして考古学史を塗り替えただけでなく、古代の偉大な「出雲」の姿を再び現出させるかのように、現代の日本に突如として目覚めたのです。



展示の様子 銅剣 A25・A26・A27

銅鐙 6号

銅矛 15・16号

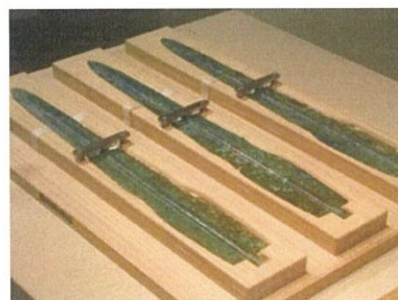
(文化庁蔵・古代出雲歴史博物館保管)

[第2期公開期間: 6/4(水)~7/28(月)]

学芸員の“推し”! ~358 本中唯一の異色銅剣~

第2期の“推し”は“A26 銅剣”です。A26 は、鉛同位体比分析の結果、朝鮮半島産の鉛が含まれている事が分かっています。その他 357 本の銅剣の鉛は中国(華北)産であることから、その唯一の特徴において、A26 をモデルにしてその他の銅剣がつくられたのではないかなという説もあります。

しかし、A26 が特別な形状をしていない事、特別な埋納位置にあるわけではないことから、上記の説に対し疑問を投げかける研究者もいます。いずれにせよ、異色の銅剣であることには間違いありません。



A26 銅剣(中央)

荒神谷発掘物語 その②~苦心を極めた取り上げ作業~

銅剣を取り上げる作業のために、穴の上に丸太を敷いてその上に板敷きの作業場が作られることになりました。この作業場があることで、調査員は腹ばいになることができ、「銅剣の上の土を竹べらで取り除いていく」という細かな作業は容易になるかと当初は思われていました。しかし、実際には、調査員は顔を下に向けてることで汗が目にとまり、さらに長時間の作業により頭に負担がかかって、一日の終わりには顔が「アンパンマン」のように膨れ上がっていたといいます。

(文: 学芸員 N)



銅剣の発掘作業の様子

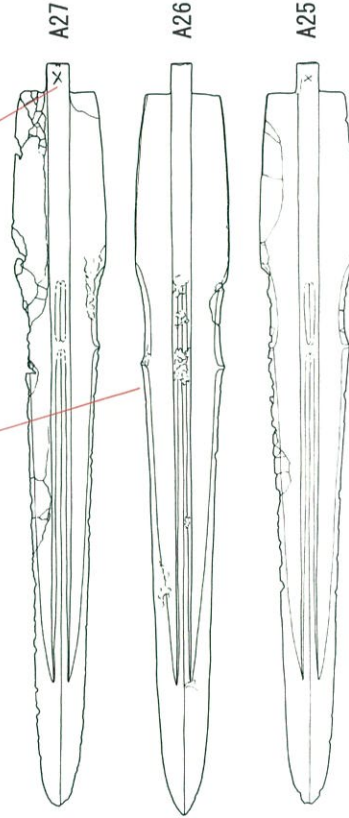
(画像提供: 島根県教育庁埋蔵文化財調査センター)

銅剣

A26は唯一、他の銅剣と金属比が異なる（錫が多く、朝鮮半島産の鉛が使用されている）という特徴がある。

A25は展示の裏面に刻印がある。

「×」印の刻印



358本出土したうちの3本で、この3本は隣あって埋納されていました。
荒神谷遺跡の銅剣はすべて「中細形C類」と呼ばれるタイプです。

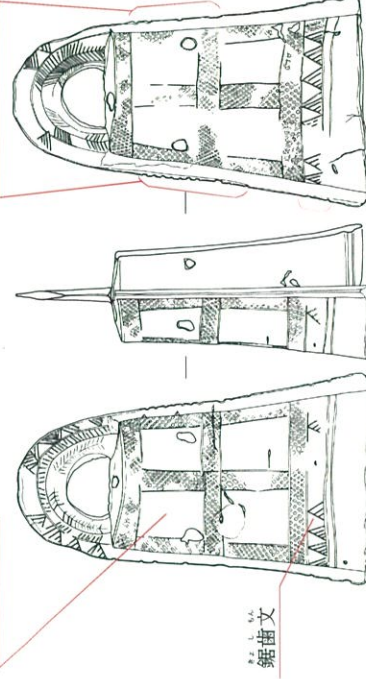


長さの違い／プロポーションの違い

銅鐸

4区装束模文

鐸身を4つに区画する。



6号銅鐸

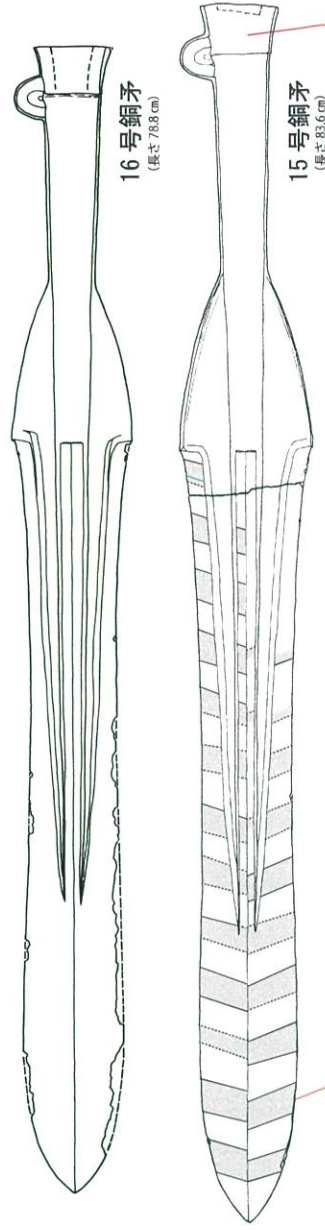
(展示の裏面)

鍬歯に施された刻み

6個出土したうちのひとつです。
この6号銅鐸の鐸（身の周囲）につく平たい部分）には、計17カ所の刻み目が施されています。その意味・用途はわかっていません。

銅矛

16本出土したうちの2本です。ともに「中広形」と呼ばれるタイプで、荒神谷遺跡の銅矛のなかで最も大きな部類です。



刃部の研ぎ分け
研磨方向を変えることにより、矢羽根（綫形）状の文様をつけている。光を反射させると浮き上がる。

袋部の内側には、鑄造時の中子土がそのまま残されている。柄を一度も差さなかったことをものがたる。